

父—その死—

—— 高齢者文学人生論

幸田露伴 (1967-1947)

幸田文 (1904-1990)

参考：小林勇「蝸牛庵訪問記」

『父--その死--』(1949) 「中央公論社」

『おとうと』(1956) 「中央公論社」 監督：市川崑(1960)

出演：げん 岸恵子 父 森雅之
碧郎 川口浩 母 田中絹代

ぢや。おれはもう死んじやふよ

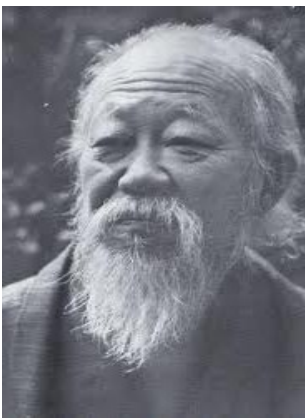
文豪幸田露伴の最後の様子は娘の幸田文『父—その死—』によって伝えられている。

露伴は昭和二十年、空襲で小石川の家を焼かれる前、長野県に疎開していたが、終戦後は千葉県市川市萱野に移り住み、昭和二十二年七月三十日に生涯を終えた。享年八十一。

空襲以来、寝たきり老人になり、好きな読書もできなくなったが、亡くなる数ヶ月前に口述筆記によって「芭蕉七部集評釈」を完成させている。また、「長く生きたもんさねえ、幸田のなかぢや一番長生きをしたかもしれない」と言い、「花がしぼむのも鳥が落ちるのも、ひっそりしたもんなんだよ。きつと象のやうなものだつてさうだろうよ」とも言った。

そして三日前のあけがた、「ぢや、おれはもう死んじやふよ」と娘に言った。偉大な文学者の最後にふさわしく、達観した上で、淡々と大往生をとげたという印象を受ける。

しかし、偉大な父を看取る娘も文学者だ。臨終をきれいごとだけではすませていない。「突然父のからだは妙にひく／＼した。見る見る顔・肩・胸・手、からだ中が痙攣してびく／＼がた／＼ひどく揺れだし、そこいら中がめい／＼に歪んだ。こはい眼つきが剥きだしたり隠れたりした。私は恐ろしく膝で立ってしまひ、小林さんは父の肩をしつかり押さへて、「先生」と呼んだ」。



父—その死—

——— 高齢者文学人生論

小林さんというのは岩波書店支配人の小林勇。彼も『蝸牛庵訪問記』で露伴の臨終の様子を冷静に伝えている。

七月十一日、出血。武見医師の往診に同行。

二十二日、肺炎で発熱。

二十三日。満八十歳の誕生日。

二十五日、肺炎はくいとめたが、食欲がない。

二十八日、重態におちいる。

二十九日、「アハハハ」と大きな声で笑った。

三十日、四たび、はげしく痙攣した。九時十五

分、絶命。文子さんが静かな声で「お父さん、お静まりなさいませ」といった。

文豪らしい大往生の記録だが、書いたのは娘と編集者であって、本人ではない。どんなに偉大な文学者でも自分の臨終を書くことはできない。

「生まれいづる苦しみを誰も知ってゐないように、死の苦しみも誰も証拠だてゝおちいった人はないようだ。死はその人の上になされても、死の苦しみといふものはあるいはその人と最もかゝはりを深き生きのこりものに授けられるものではないだらうか」と幸田文は記している。

露伴にとって最もかゝはりを深き生きのこりものは、掃いたり拭いたりしかたや薪割りは教えてやったが、「お前が馬鹿なのは本を読まないからだ」と、行末が気がかりな出戻りの娘だった。

獅子の児の親を仰げば霞かな 幸田露伴